



気象局で撮影した記念写真

張泉湧・吉崎正憲：COPT81で観測されたスコールラインの3次元数値シミュレーション

論文発表は英語または中国語で行われた。中国語で発表時にはイヤホンを通じて英語の同時通訳が行われた。論文の発表時間は、特別講演は30分で一般は15分であった。

### 3. 見 学

5月12～13日、以下の気象関係の機関を見学した。

気象局：局長 C.Y. Tsai の案内で、数値予報課の CDC スーパーコンピューターシステムや全球、局地、メソスケール、台風のモデルの説明があった。その後、気象衛星課や天気予報課を訪ねた。

台湾大学：台湾大学の 大気科学研究所の George T.J. Chen が、台湾大学の気象学教室の研究活動を紹介し

た後、気象局の S.T. Wang, 空軍気象連隊の K.Y. Liu, 民用航空局の C.P. Pu, K.E. Estie, 浅井, 菊地, 赤枝, R.E. Carbone, P.S. Ray が各々の属する機関や各自の研究活動を紹介した。

中央大学：中央大学の 大気物理学教室の T.C. Wang Chen の案内で中央大学の研究活動や1985年5月に完成した Chung-Li VHF レーダーが紹介された。

台北国際空港：民用航空局の C.W. Lee が空港のドップラーレーダーの作業システムを紹介した。

### 4. おわりに

1988年に台湾の航空が自由化されて以来、飛行機の往来が非常に活発化した。小型機の空港を含めると、空港の数は36ヶ所以上になった。そのため航空気象と飛行安全の問題は一層重要になった。今回の会議では、ドップラーレーダーの運用は航空気象の業務に対して非常に有効であるとの報告があった。また、気象局が台湾北部の瑞芳に、空軍気象連隊が台湾中部にある台中空港に、ドップラーレーダーの建設を計画中との報告もあった。それが完成すると、台北国際空港のドップラーレーダーは2台になりマイクロバーストや強風のシャーの探知が可能になり、これらによる悲惨な航空機事故が未然に防げるだろう。

民用航空局の陳家儒 (Chen Chia-ju) 局長の閉会の言葉にあったように、飛行機の数が増えている現状では、航空や気象の関係者の交流及び学術研究協力が一層強化されることが望まれる。(文中敬称略)

## 日本気象学会秋季大会シンポジウムについて

日 時：大会第2日 平成2年10月25日(木)  
15:30～17:30

場 所：京都府総合見本市会館(パルスプラザ)  
稲盛ホール(A会場)

テーマ：「集中豪雨」

○座長兼司会

余 田 成 男(京都大学理学部)

○話題提供者および講習内容(予定)

◆解析・メカニズムについて

小 倉 義 光(イリノイ大学名誉教授)  
(日本気象協会顧問)

◆予測について

萬 納 寺 信 崇(気象庁 数値予報課)

◆情報・防災について

吉 澤 博(神戸市嘱託 防災・循環  
担当)

○最後に総合討論を行う

(正式の講演題目は後日お知らせします)